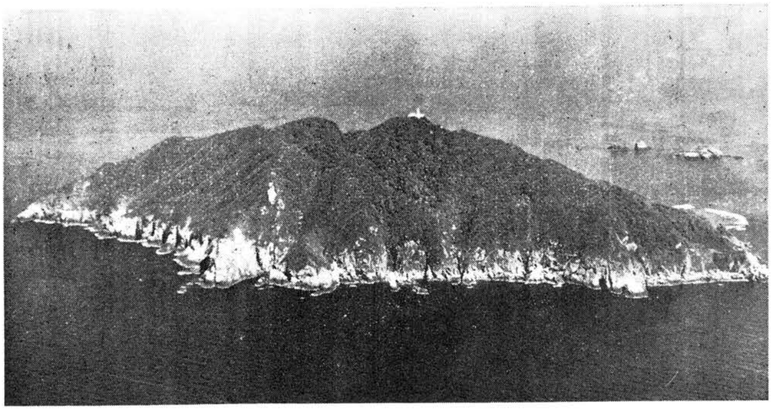
宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊 133 番
定価一年送料共　500円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡支社　福岡市吉塚西林寺町 西林寺内
電話 ㉟ 九四五六
本社　京都市下京区油小路通六条北入
電話 京都 ㉟ 六〇六・一三三四番
七三三七・九七八九番

三笠宮殿下当社三宮御参拝



沖ノ島祭祀遺跡御視察決まる

歴史学者として殿下の御名声はあまねく国民に周知の如くで、現在東京女子大学で講師として教壇に立たれて居られます。

昨年八月六日より九月廿五日迄約五十日間にわたり当大社の国宝展が、東京丸ノ内出光興産株式会社美術館に於いて、文化庁後援のもとに開催された際、皇太子殿下並に同妃殿下の御来館を仰ぐ等の光栄に浴した次第であります。開催中多数の高貴高官の方々も御覧になられましたが、三笠宮殿下も一学者として御来館になり、その精巧絢爛たる祭祀遺品二万余点（現在、国宝、重要文化財に指定）を御覧になり、崇高深厳なる祭場が現存する沖ノ島へ渡島を御希望され、今回御参拝のはこびになった次第であります。一学者としての行動で勿論非公式でありますが、幸い十月五日より沖ノ島調査団が渡島しており、調査期間中に御視察なされるわけで、本調査団顧問である三上、小山、杉村外三名の学術調査顧問の先生方が随行申しあげる手筈になっております。殿下の当大社辺津宮及び、大島中津宮御参拝の御日定は次の通りであります。

十月十日（体育の日）
午前十時、宗像大社御到着
辺津宮高宮御参拝、宝物館にて御休憩
午前十一時、宗像大社御出発、
正后十二時、神湊みなと荘にて御昼食
午後二時、神湊波止場御出船
午后二時三十分、大島御到着
中津宮御参拝
午后四時、大島御出船
午后四時三十分、神湊波止場御到着
午后四時四十分　神湊みなと荘御到着、御夕食、新館にて御一泊

十月十一日、土曜日
午前八時、神湊波止場御出船
（福岡海上保安部所属警備艇）
午前十時、沖ノ島御到着
沖津宮御参拝、灯台にて御昼食、調査現場御視察、御宿泊

十月十二日、日曜日
沖ノ島御滞在

十月十三日　月曜日
午前九時　沖ノ島御出発
午前十一時三十分　福岡海上保安部前岸壁着
午前十一時五十分、西鉄グランドホテル御到着

（以上）

沖ノ島祭祀遺跡第二次調査団愈々渡島!!

先ず昭和四十四年より三カ年に亘って行われる調査を第二次沖ノ島調査とし、既に今迄行われた調査を第一次として本誌では報告します。

今春五月八日より二十八日迄、沖ノ島の祭祀遺跡を中心に地形測量が行われたが、未だ充分でなく再度渡島し拡張測量と、先回測量完了地域の発掘調査を行うこととなった。渡島の期日は先発隊が九月二十七日、本隊は十月五日と予定され、調査期間は十月二十日迄となっている。

今回は別報の通り、調査期間中に三笠宮殿下の二泊三日の御視察が決定しており、先発隊は宿泊所其他の準備を整えると共に、測量を完了し本隊の渡島と合流し調査を愈々開始する計画で、先発隊の任務は重大である。

先発隊の陣容は、出光美術館の松見守道氏を隊長とし出光関係七名、鹿島建設測量班、日限土木部次長（九州支社）外三名、千代田福岡営業所（永大ハウス）四名、九州大学一名、大社職員二名の十八名のベストメンバーである。

本隊の渡島は前記の通りであるが、そのメンバーは九州大学助教授岡崎敬氏を隊長とし、小田富士雄助手外一名、同大生二名、福岡教育大生二名、県文化課一名、写真助手一名、大社職員三名の計十二名で先発隊同様ベストメンバーである。

平素は三名の山頂灯台職員、一名の大社職員と十二、三名の避難港作業員であるが、三笠宮殿下の御滞島の二、三日は三十七名の調査隊となり、島も大賑いをていしてオガチ（海島）も大いに驚く事であろう。

宮様御視察の光栄を浴す今回の調査は、考古学関係者は勿論日本全土にその話題を投げ、御神徳のあまねく光被するよう成功を祈る次第である。

（写真は先般渡島の予備調査のメンバー）

論説

祖先崇拝と祭りの伝承

哲学者や、宗教学者の中には、わが日本民族の伝承する祖先崇拝の起原を、死霊に対する生存者の恐怖観念に起因すると論ずるものもあるが、その因素には子孫の繁栄、幸福をはかり、同族を愛護した父祖の霊を崇拝する純粋観念もあって、必ずしも恐怖観念を要素としているとは言えない。秀れた父祖の業績を嗣いだ子孫が、その霊が期待するか、或いは生前強く要望していた結果が得られない場合、死霊の怒りや祟りを恐れたことはあろう。それも死霊との時間的経過、世代的変移によって、信愛敬慕の感情に変ってくる。

古事記・日本書紀をはじめ、古典の神話時代の記述は、祖先の霊を追慕し、その愛護を願うために、祭祀の習俗が起り、やがてはこれを慰めるための派生的行事の形成伝承を見たものと言うことが出来るのである。

祖先の霊に保護を祈る習俗は、開運・豊作・治病・安産等の祈願であり、国家や、地域社会に大事発生の場合には、戦勝、行旅の加護を祈願することもある。そして一面に祖先の霊を慰める行事として、神楽・歌舞・音曲等の神賑の発生伝承を見たものである。

一般に、自然発生的段階に於ける信仰の対象、即ち神とあがめる霊性には、多くの種類が見られるが、わが国の民俗慣習の上に最も主要な地位を占めているのが、祖先の霊を祭る祖先崇拝である。神道が宗教学上に、祖先崇拝教とさえ名づけられる理由は、祖先の祭祀が精神生活の根本義と定められてきたからである。

わが神道に限ったことではないが、祖先崇拝が祭祀の習俗となったのは、霊魂不滅の信仰と氏族制度の生んだ産物である。わが上代の厳しい氏族制度の社会構成では、霊魂不滅の信仰が、その追慕の念を誘い、冥護を祈願する習俗に発展したことは容易にうなずける。ここで、特に考えられることは、神の所在を古典の神話が如何に扱っているかという点で、高天原の記述をうかがうと、神は随時随所に現われる。神社または特定の祭場に鎮まる分霊の可能を信じて、他所に遷し迎える等の観念方式が、神の所在観として注目されるところである。これは神話史伝を通じて、神道の血脈として生き続けてきている。

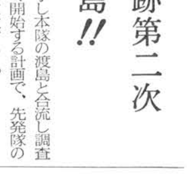
さて祖先崇拝を強めた一面の理由として、実生活上の恩恵に感謝する氏族感情を挙げなければならない。上代以来、氏族それぞれの職業は世襲であって、宗家から分れた分家、分家から更に分れた再分家、時代の経過に従って分派する数は多くなっても、宗家を中心として同一の職業を守る厳格な社会組織は、鉄則にしばられて崩れなかったのである。

即ち、武事を掌るもの、神事に仕えるもの、器具や、衣服食糧等を作るもの、それぞれの家職が氏族の伝統的分業となっていたのである。家職はその氏族以外のものには出来ないし、許されない専業でもあった。

後世の氏神と、氏子の関係に因る祭祀の起原は、こうした事情に発生したものであって、一氏族が発展拡大して或る地方に群居し、その地域内に他氏族の居住をゆるす段階になって、一族の祖神を祭る氏神祭祀は、地域の守護神、即ち産土神（うぶすなのかみ）となっている。

産土神は一氏族の一部が、他の支配地域に移住して、固有の祖神を祭り、或は移住地域に先住する他氏族と共同して、守護神を祭る場合もあって、血縁的関係の氏神は、地域的関係の産土神に転化していったのである。後世の公共的性格を持つ神社の形成は、こうした氏族移動の経過に、その間接の事情をうかがうことが出来よう。なお、神道と西欧の宗教との根本的相違点も、この産土神の祭祀と対照して考えれば、容易に首肯されよう。彼の欧州・中近東・アフリカの遊牧の民族は、各地に家畜の牧草を求めて移動し、一地域に定着する生活条件を持たなかった。その生活上の特性が、天にまします神を信仰し、地域的血縁的の神を持ち得なかったのである。この生活上の理由による信仰の発生は、長く欧州的遊牧民族に共通の信仰形態を持たせ、わが神道の本質と全く異る信仰を生むに至ったのであろう。

わが祖先崇拝とその祭りの発生伝承とは、一には民族が定住し得た国土の恩恵によると言っても過言ではなかろう。



阿蒙少言

人間の生活は、ごく自然に順調に事が運ぶ情況に、安易さを覚え楽しさを感ずる。安易さをさえ自覚しない場合も多い。ところで、作られた情況はこわい。情況の作為に負けないように、そしてその作られた情況に中毒しないように。江戸時代以来、民衆に愛好された歌舞伎、今日も役者の心得は、作られた情況に負けない信条だそうである ○この頃東京のある劇場に、長らく裏方をつとめた老人と会って、種々の思いで話を聞いた。彼等の役割は、世に言う道楽稼業で、老いては老優の磨きのかかった演技とは反対に、駄目になって消える由。まわり舞台の下を、奈落と呼ぶが、奈落の操作も受け持てない転落はさびしい話 ○芸道には「間あい」が大切。それだけに間のびしない呼吸の合致がやかましい。「あげ幕」と言う幕ひき役が、出てくる音羽屋菊五郎の所作と、呼吸が合わぬ失敗をやり、興業会社の役員はじめ二十五人、音羽屋の前に列んで詫を入れ、二時間に及ぶ芸道「間あい」の説教 ○舞台に殺陣起動する役者の身振りを引き立てる「つけうち」の拍子木の打ち方、これがまた難しい。打ち方が役者の調子に合わねば、名演技も番狂わせとなる。観客も通になると、なかなか目が肥えていて、閉幕後楽屋に苦情を持ち込む。その不手際の悪評や忠告に、盲人の客があるそうで、見えない目が心眼を開いて芸道の妙味を観賞するとは驚きの至り ○松本幸四郎はその生涯に、勧進帳を三六〇回余り演じたが、常にめくらの見物を考えていたとか。舞台での煙管の敲きよう、役によって違う刀の持ち方置き方。芸道もまた武道と同じ厳しさがある ○作られた芝居の芸といえども、負けてはならない中毒してもならない戒めがあると聞いては、やはりこわいもの。

（白雲）

第一〇〇回 宗像大社献詠歌

毎月十五日〆切　詠草到着順

香椎　織田　橡雨
（宗像大社の改築を奉思して）
斎鎚（をみづち）の音もかしこく聞ゆらむすがしき秋を神のまにまに

戸畑　田中ハツセ
よく聞けば鉄を打つ音車の音何時も気づかず過しゐる音

吉田　占部　由久
戸を繰れば水の如くに流れ入る初秋の風さわやかにして

大井　吉田ますみ
離れ住む子に書く便り漫珠沙華早や川土手に咲き初めたりと

大井　木原ふさ子
運動会日延べとなりし雨なれどうるおいうれし秋の物播く

福岡　吉田　信夫
名島潟朝焼け凪ぎて向い岸の白き家群はけさやかに見ゆ

武丸　原田　リノ
ひ杓の水たちまち吸ひし鉢の菊しばし日陰に移しやりたり

名残　竹原　圓
夜祭りに踊り疲れて花笠はあけがた近き庭に濡れおり

宮田　片山　朔子
出揃いし穂をわけ入りて衣につきし黄色の花粉愛しみつ払う

門司　永島　哲夫
夜の秋も更けゆきバスの終点に人影動き灯が消えにけり

津屋崎　芹野フサ子
ひとときの和み求めてもの言わぬ吾子の遺影と語る明け暮れ

津屋崎　麦野　時雄
夏の朝庭に茂れる立葵一きわ高く咲き昇りつゝ

大井　村山　幸生
便りよき世となるにつけしきたりの祭りは何時かさびれ行きつゝ

久留米　篠田太郎坊
車窓よりの朝けの風のすがしくて秋を思わす青田というに

田熊　鷲頭かつ代
山笠に力を凝らし若きらが祇園まつりの街をもみゆく

村山田　吉田佐市郎
老いの身のいたづきいやす大岩の医院に語る同病の友

徳重　石松やす子
甥が乗る車に事故のなきがごと守らせ給へ宗像の神

田熊　小野角次郎
玉砂利の光りて見ゆる神域は朗にも清く風の過ぎゆく

田熊　小野かをる
祭り日を色どる花火夜となれば人ら川原の土手を埋めぬ

田久　小方　実
御神幸のどよめきの中をのがれ来て星のきらめく夜の空を見つ

福岡　麻生　初栄
つねづねは明るき吾子の窓なるに風邪ぎみなれば暗くひそけき

深田　中野　節子
潮みちし川辺に低く咲きてゐる合歓（ネム）の花淡し朝靄の中

宮田　片山　一
山の児のものぐさもなく採りくれし山桃の房妻に持ち来るも

香椎　桜井　ツ子
台風のそれたるしほにくさむらのいまだ稚きこえとは知りぬ

宮田　北原　君子
故郷も此所病院も同じ陽のまぶしく照りぬ草もなびいて

戸畑　藤井　孝子
丹精に作りし庭の夕顔や真白き花に暑さ忘うる

田島　吉武　武雄
（三十二年前北支戦地にて）
いとし子を戦火の中に残したる母よいずこ我はたずねん

宗像　岡部　住雄
宗像の北辺に立ちて永遠に民をし守る四ツ塚の山

平井　土性　トヨ
ほととぎす鳴くよと友を呼びたれど二度鳴かず窓ゆ見ゆる山

戸畑　安川　浄生
海果ての雲おごそかに輝きて赫き日出づる日向の海は

武丸　立石ろせ乃
西空の水平線に陽は入りていか釣り舟の灯数増しゆく

京都　葦浦　柴舟
街かどにふと会ひし娘にこやかに職場に在りし日をし語らふ

佐賀　都渡　耕喜
己が手に乗らぬ相手のきびしさを肌に知りつつ土俵を仕切る

田島　山田　幸雄
玄洋の守りの神のしづまらす大島うかぶ秋のうなばら

宗像大社
史　話

社史の中の宗像郡民 (十)

藩政下の義民節婦

世上賞讃の義民烈士と知りつつ、為政者が封建の秩序を守るため厳しく処断したことは、赤穂浪士佐倉惣五郎などの例もある。

前述の博多の伊藤事件は、禁制の密貿易を理由とした藩庁の極刑であったが、津屋崎六人衆の処刑は一村漁民の窮状を救うため、決死の強訴が動機であった点佐倉義民伝の内容と似ている。

洋々たる玄界灘を舞台に、宗像水軍の勇敢な威力を四隣に鳴らした伝統は、七浦の漁村に伝わり進取素朴の海洋氏族として生きてきたのである。大島、地ノ島、鐘崎、神湊、勝浦、津屋崎、福間の七浦は、現代も七つの単位漁業組合を構成し、七浦連合は古くから大社の海洋行事にも協力、先年海洋神事奉賛会を結成して、十月一日の放生会大祭には四五百艘の漁船を動員して、海上神幸に供奉する盛観を展開している。

江戸時代に入る以前から、沿岸の網漁は、天然の地形と豊富な資源に恵まれた漁民の主要な漁法でもあった。その盛衰は漁民の生活に大きな影響があり、漁業区域つまり網場は重要な生命線であったので、網場の境界は古くから死活問題として争議が絶えなかったようである。弘治二年、永禄三年と断続的に、宗像社領時代に津屋崎と勝浦の境界争いが続き、大宮司氏貞もこれを裁決したこともあった。寛永十七年両浦の係争が又しても大きな火を吹き、六人衆の奮起となって悲しい義民伝を綴るに至ったのである。次に芳名を記してその遺徳を讃えたい。

庄屋　佐兵衛
組頭　七郎兵衛
同　長兵衛
同　甚兵衛
同　作右衛門
同　孫右衛門

この事件は、社領時代と藩政時代に跨がった特筆すべき史話であって、教安寺に吊魂の碑面もあり、郷土の資料によって編集された宗像郡誌にも詳しく述べられているので、ここに再録を避ける。

なお、最近大社で発刊した宗像史話伝説と題する小冊子にも、津屋崎六人衆後日譚が開巻第一頁に収録されている。後日譚は六士の義心に感動した藩庁役人が、刑死直前のきびしい獄中に送った温情で、やむにやまれぬ義心と義心とが織りなした人間漁民と人間役人にまつわる佳話である。

社史に直接関連する藩政については、社領の寄進、藩主の奉献等は記録によって明かであるが、沖ノ島に防人（さきもり）即ち警備隊を置いていたことは着目に値する。これも青柳種信のような文筆の士が、沖ノ島に勤務し防人日記などの著述を残しているので、ここには述べない。藩政とその出先機関が、郡民と直接触れ合った事件も多かっただろうが、明るい面を少しく付け加えておこう。

純朴勤勉な民情は、敬神崇祖の美風を血脈として、幾多の孝子節婦義人を生んでいる。藩政はよくこれらの功徳を顕彰した。恐らく筑前藩の広域な藩政下にあって、宗像郡民ほど尊敬すべき多くの人物を持つ地域はあるまい。その人物列伝も、宗像郡誌が詳細な資料の収集検討によって、登載しているのである。

中でも孝子正助翁の事蹟は、あまねく世に知られ、度々藩主の表彰賞讃をうけており、関係文献も少くない。孝徳を軽視するが如き風潮の見える今日、翁はあくまで郡民の至宝としてその偉徳を仰ぎその祭祀を伝えてゆかねばならぬ偉人の一人である。

他にも多くの節婦義人の佳話を持つことは、大社の史話の主流に関係なくとも、郡民の誇りとして伝承されなければならない。政治的に神郡の実体は、藩政に吸収された時代ではあったが、郡内全域に神郡の精神は絶えることはなかった。それが明治維新によって藩政を離脱して後、本来の宗像人気質を盛り上げ、幾多の人材を輩出したのである。

☆ ☆ ☆ ☆

復興期間大幅短縮

—昭和四十六年六月を目標に—

既報の通り、宗像大社復興期成会は 去る八月一日付で会則を改正、また役員を大幅に増員して機構を一新、当社復興事業に対する体制を一段と強化したが、更に本事業の具体的推進の要めとして、出光興産株式会社福岡支店、支店長代理内田澄氏が復興期成会事務局長に就任され、仝店竹井、麻生の両社員共々に当社復興事業関係の仕事に専従されることになった。

こうして本事業達成の機運は一段と熱を帯びてきたが、この度、出光会長の御指示により、事業推進のテンポが急速に早められることになった。即ち、当初の五カ年計画を大幅に短縮し、昭和四十六年六月、御本殿、拝殿修復完了の時期と相俟って、他の諸工事も一挙に完成させようというものである。御本殿、拝殿修理工事は着々と進捗中で過日仮殿整備並に幄舎仮設がなり、神門右側守札授与所裏側には修理事務所が設置され、担当の田原技官を中心に工事が進められており、計画通り昭和四十六年夏には完了の予定である。従って来年早々には、先づ神社前面に、一般私祭の祈願所と社務所を包含した大祈願殿の建設工事がはじまる予定で、目下、設計担当の伊藤建築設計事務所では、設計図の作成に大童である。更にその後、斎館、勅使館、参拝者休憩所等の建設、造園植樹等の境内整備が次々に行われる予定で、ここ一、二年のうちに当社の様相は目覚しい変貌を遂げる訳である。

こうした事業促進の機運と呼応して、神社前面の用地買収も、この程、全面的に円満妥結、来年三月迄に全戸移転の了承を得たが、既に新居を建築し移転を終えた家も数戸あり、目下、旧建物の解体作業が急ピッチで進められている。

一方、本事業協賛の募金活動も着々と進められているが、中でも郡内氏子募金は二年度を迎えて、各地区で神社総代を中心に活発に行われている。本事業に対する氏子の方達の関心と期待は非常に大きく、各所で温い協力と励ましの言葉を戴き、貴重な浄財を寄せていただいているが、こうした御熱誠にお応えすべく、関係者一同、一丸となって本事業達成に邁進の決意を固めている次第である。

沖中両宮奉賛会をはじめ

全島民が奉迎

来る十月初旬の三笠宮殿下御参拝を前に、宗像大社各宮で其の諸準備等が急がれている。特に中津宮の鎮座地大島では、宮様の中津宮御参拝、沖津宮遥拝所への御参拝、大島御休憩等のスケジュールに加え、沖ノ島への渡島中継点としての基地的役割があり、島のメインストリートともいうべき主要道路の大半を御通行になっての遥拝所御参拝が含まれるだけに島の人々の喜こびと熱の入れようは大変なものである。

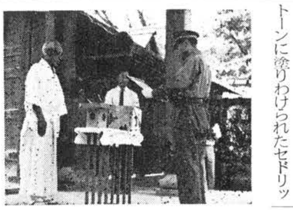
一生にまたとない光栄に浴するとあって、沖中両宮奉賛会、並に敬神婦人会では、去る九月十五日、中津宮月次祭奉仕日には全員が参拝し、久保宮司より発表された宮様御参拝のスケジュールや関係要項等を熱心に聞き、質問をしたりメモするなど、並々ならぬものがあった。其の後、神社境内整備に関する事や、お迎えに関することなどのアウトラインが会議された。

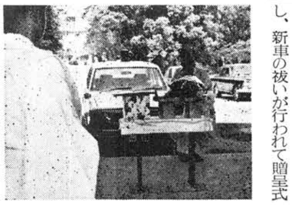
同奉賛会、並に敬神婦人会は中津宮境内、建造物、沖津宮遥拝所、池等の清掃、境内地整備奉仕等を始め、池には水を引きマス等を放魚することなどを決め、その諸準備に着手されている。その外に、十月早々には境内へ玉砂利を敷く事や、全島あげて国旗掲揚をすること、村道整備は村民全部で奉仕するなどがきまり、着々と進行中とのことである。

敬神模範村大島の全島一致の姿と、これらの御奉仕は、何ものにもかえ難き宮様への贈ものとなろう。

県警パトカー

宗像大社号二号が誕生





去る二月二日、当社から福岡県警にパトカーの贈呈が行われた。当日、午前十時神門前に白黒ツートーンに塗りわけられたセドリックが置かれ、宗像警察署長を始め、郡交通安全協会等関係者が集まって、拝殿で交通安全を祈願し、新車の祓いが行われて贈呈式に移った。先ず当社久保宮司から新車のキーが警察署長に渡され、巫女さんから花束が贈られた。次に警察署長から当社へ感謝状と記念品がおくられた。

この後、報道関係者の取材があって贈呈式を終了した。この度のパトカーは、宗像大社号二号車と名付けられ、当日から交通安全の警備についた。

昨年末、宗像警察署を通じて福岡県警にパトカーを寄贈して欲しいとの要望のもとに、当社はいすずフローリアン一台を寄贈したが、宗像大社の鎮座する宗像郡を縦貫する三号線は一台では足りない。二台あれば交通安全の実を挙げることができると懇請され、この度の贈呈となったもの。

祭りまつり (十)

秋、いまたけなわ、毎年放生会の季節となると万物が豊かな稔りをみせてくる。そこで人々は「柿も生姜も放生会」と呼びあってこの祭を祝福する慣しとなっている。

放生会はその起源を仏教の殺生戒に基いて生物を池川山林に放って供養をする儀式に発している。今日、文献に見えるものは「列子」に趙簡子が元日に鳩を放ったことを記しているのが最も古いと言われている。またそれ以後中国では寺廟の祭日や仏の誕生日には魚鳥を買って放す習俗があった。

吾が国に於ける最古のものは宗像大菩薩御縁起、第一宮託宣に「吾れ昔、五千九百余の従神を卒い二千余万里の風浪を凌いで、御手長（旗竿）を振い、異国の凶賊を害した。是れ則ち国のため民のためとはいえ、若干の殺罪を犯すところである。よって早く放生供養すべし」とある。また一方、宇佐八幡宮にも、「隼人（はやと）征討に際して八幡の冥助によって功をあげ得たが彼我の間に落命したものが多かったので放生を行うべし」との縁起もある。この二つの神託が源流となって千年以上にわたって民族の間に放生会が生き続けてきた。

中世に於ける宗像放生会は八月一日に始まって十六日暁に終る大規模の祭事であった。

先ず八月一日第一宮に於て最勝王経、仁王講会仏事を行いその後神職が諸郷を廻り放生会の諸役を促して準備にあたる事になる。

大祭が行われたのは十三日から十五日までの三日間で十四日に田島三所宮、許斐織幡神社のいわゆる五社の神輿が浜殿に神幸し、十五日に浜殿に於て大神式が行われ、終って十六日暁、還御になって終っている。いつの時代も宗像の人々は神人和楽の秋を放生会で歓びあってきた。

許斐（このみ）の旗風

（其の三十）

葦落紫舟 作
福田長庵 画

許斐三代 (一)

許斐氏系図によれば、許斐家第三十九代頃にあたる許斐氏能は明応八年（一四九九年）の十二月五日に宗像郡田島村芦間岩ケ崎に於て戦死、またその次の三河守氏任は永禄三年（一五六〇年）の十月十日吉原に於て戦死しており、次いで氏則の子（氏任の甥）左京亮氏賢は永禄四年（一五六一年）の八月十六日に許斐城防戦中に分捕高名の上で戦死していることが見えている。

宗像大宮司家の藩屏たる家柄であり、また郡内中央に屹立する許斐岳の戦略的にも重要な許斐城の城主たるべき者が三代にわたって戦死しているという事実は、戦乱の世のただならぬ様相を如実に示しているものといえよう。

しかし、本家たる宗像大宮司家が、若しも戦国時代末期以降、江戸時代を通じて存続していたならば、宗像の一党が離散したとは考えられないし、以後の宗像大社の御社頭も亦衰微の憂き目を見たとも思われない。

大宮司家断絶後の宗像大社は豊臣秀吉による神領の没収と共に数千の武家は無論、七十数名の神官僧官、四百余名の使部らも何処ともなく離散し、黒田藩治下の江戸時代を通じてわずか百七十三石程の社務費を以て残留した社官らが細々と祭祀の命脈を伝えていたに過ぎなかった。

幕末、外国の侵攻がその度を加えるに至って、朝廷より外敵攘除のため、懇祈をぬきんずべき倫旨を屢々寄せられ、かくて明治の御代にはいち早く官社として最高の優遇を受け（官幣大社）現在は全国九千余社の宗像奉斎神社の総社としての社運の興隆を見るにつけても、戦国末期の社中の悲劇と、江戸時代を通じての社頭衰頽のことがいみじくも思い合わされるのである。

さて、本論の「許斐三代」を振り返ってみよう。

許斐氏能（うじよし）

長州の大内氏と豊後の大友氏とは積年の抗争を続けていた。

明応年間、豊後の国の僧に大聖院宗心という者があった。

彼は僧職にありながら「非職ノ武勇ヲ好テ腕ダテヲスル事俗人ニ勝レ」ていた。その頃、たまたま大友家に内紛があって、豊後守大友政親父子が義絶したことがあった。この時にこの僧宗心が大友家の内紛を利用して大内義興に働きかけ、野望を遂げて大友家を滅ぼそうと企んだ。

大友家では丁度領主の内紛、領内人心の離反、政道の混乱があったので、長州側としても攻撃の好機でもあったのである。

明応七年八月、大聖院宗心を案内役として陶次郎興信、杉七郎重清らをはじめとする大内党五千余騎が豊後境に進発した。

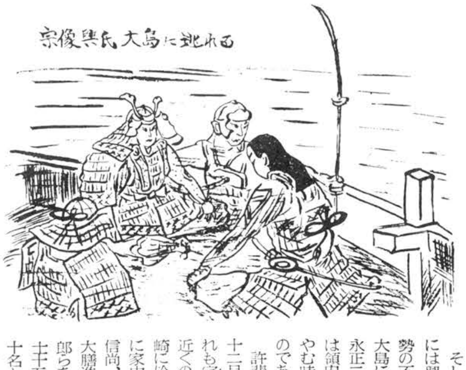
大友方でも人数を繰り出し、佐田の城に入って対陣したが、大内方の後詰が一万余騎となった為、大友方がすでに危うく見えた。

その折しも、大内義興の弟、氷上某が本国で謀叛を起したとの急報があったので、義興は急遽本国へとって返した。大友方にとっては好機到来である。

筑豊の山野は俄然大内方と大友方の勢力の激突する戦場と化したのである。

大内方の味方は神代紀伊守貞徳、全名三郎兵衛武総、原田弾正興種、それに宗像大宮司興氏の諸勢。敵方は太宰少弐家の軍勢を主力として筑前の所々を攻撃した。

そして一進一退、終には興氏の宗像党は大勢の不利から一旦筑前大島に逃れた。爾来、永正二年に至る八年間は領内に干戈の響きのやむ時とてもなかったのである。



宗像興氏大島に逃れる

許斐氏能は明応八年十二月五日、領内のそれも宗像辺津宮のすぐ近くの田島村芦間岩ケ崎に於て、乱戦のさ中に家中の大和左衛門尉信尚、浜源左衛、古部大膳進頼安、縄分彦七郎らをはじめとする勇士十五名、その僕徒数十名と共に戦死をとげた。

敵は大友方の立花山城守、麻生与次郎、同与三郎であった。「卯ノ刻ヨリ申ノ終ニ至ルマデ追ツ返シツ、幾度トモナク戦ケル」と「宗像記追考」にある。

此の時の合戦に於て「其外手ヲ負者ハ数シラズ」という有様であったので、「或ハカカラレ、関ノ声絶ル間モナク、矢石ノ雨降ラヌ時モナシ。イツ果ツベキ戦トモ不見」とあって、宗像党の奮勇たちの討死等によって爾後の合戦が長引き、且つ困難を極めた状況を察することができる。

（つづく）

大井浄水場完成す

—ダム工事より一足先に—

宗像町（石田町長）が昨年五月から同町大井に建設中の大井浄水場が、去る八月末日に完成した。

この浄水場は同浄水場の前面隣接地に建設中のダムと東郷駅裏に建設中の配水基地、加えて釣川脇の浄化槽等と同町が総工費十六億円をかけて着手した大規模の総合水道敷設事業の一端で、一足さきに完成したものである。

まずダムから貯水が浄水場に送られ、浄化された水は配水基地へ送水され一般家庭に配水されるわけだが、水不足の時は浄水場へ釣川から送水されるという二本立て。

ダムの満水面積が十九万七千平方米、百五万八千トンの貯水が可能なため、ここ数年来の宗像町の発展度からして、十年後までは大丈夫である。

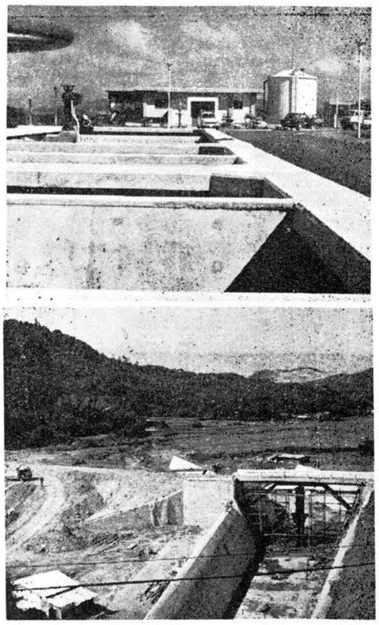
この浄水場工事を請負った岡崎工業（株）の話によると、ここの地質は第三期層の段層地帯で地盤が弱く、雨にもろいため、土砂崩れに度々みまわれ、難工事であったとのこと。そのため百二十本のコンクリートパイプを打込むなど、多額の資材が費やされ、二カ月の日数をロスしているにもかかわらず、完成したその姿にはそれらが少しも感じられぬ見事な出来映えである。敷地は約一万三千平方米。工費は二億九千万円。水槽七基を容し、一日に一万トンの水が浄化送水可能で、東郷団地二万人・森林都市一万人・赤間団地一般住民等一万五千人の計三万五千人（昭和五十三年度見込）に配水される。

現在ダム工事をはじめ他設備工事も九〇%ができあがり、九月下旬貯水開始の予定で、工事の最終工程が急ピッチで進められている。

十月初旬には試運転、来年一月から配水が開始される。

因みに一般家庭までに至るこの水の採算計算は十トン七百円（基本料金）という。同町水道課ではできるだけ四—五百円までコストダウンして給水したいと東奔西走して町民にPR。

「水に金がいるのか」の観念をすて、衛生面、電気代等を考えるとけっして高くなく、当初から給水者が多いほど安くなるとのことであった。



写真は完成の浄水場（上）と工事が急がれるダム（下）

話題の新車をみる　（三十四）

スバルR—2の巻

戦前の大航空機メーカー中島飛行機は財閥解体により会社を幾つにも分括され、規模を縮少された。その時点で事業を再開したのが富士重工業である。富士重工は戦後を生きぬく為あらゆる仕事に手を出した。自動車ボデー農業機械、スクーター等、そしてくろがね自動車の倒産等で至難の業とされた軽自動車製作に手を染め、航空機技術をフルに活用し、昭和三十三年三月三日、劃期的軽自動車を誕生させた。云う迄もなくスバル三六〇である。日く、日本のフォルクスワーゲン、モノコックボデーの元祖、四輪独立懸架の元祖等々、その技術はあく迄も斬新的。今迄考えられなかった程の広い室内スペースを保持して軽自動車の第一期黄金時代を確立した。そして十一年、第二期黄金時代に対処する為、去る七月廿四日発表、八月十五日より発売した車この車をスバルR—2と云う。

この車の特徴は旧スバルの技術をそのまま踏襲することなく、新設計のエンジン、シンクロフルのトランスミッション新方式の足まわり等軽自動車第三期黄金を築くに相応しい技術と云える。

この車の室内はまったく広い、三角窓のない広いドアーのお蔭で後席の乗り降りは楽である。そしてカーブドグラス採用と容量二〇リッターの広いトランクルーム排気量356ccアルミ合金二シリンダーにリードバルブ付エンジン、強制空冷2サイクル直列2気筒、アルミ箔カバー付エキゾースト、マニフォールド大型ディフューザーマフラー付。最高出力30PS6500rPmで最大トルク3・7Kgm／S5000rPm、最高速度115Km／h。1400m21・9秒。ここに又一ツ軽自動車の極限に挑戦する車が誕生したのである。

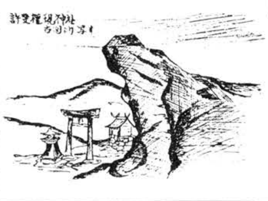
神郡宗像

摂末社を訪ねて　㈥

許斐権現（熊野神社）

宗像神社辺津宮から南方に約七キロ、宗像町大字王丸字許斐山に鎮座せられるのが、熊野神社である。当社はもと許斐権現と称したが明治初年、熊野三所の神を祀るにより、社名を熊野神社と改められ、明治五年、郡内二十七ケ村の郷社に列せられた。当社と宗像神社との関係は古く宗像五社の一社であり、明治七年本社の境外摂社に編入せられた。又当社の名は織幡神社に次いで古く、承元三年（一二〇九）七月二十八日将軍家政所下文のうちに「許斐神主氏主」として見えるのを初見とする。

神社帳によれば、御祭神は事解男命、速玉男命、伊弉冊命、宗像三女神、織幡神とあり、御由緒には縁起ニ曰ク、奉安許能美山本朝鎮護夷敵降伏之為メ祈、文徳天皇之御宇天安元歴丑年、紀州牟婁郡之従本宮勧請、此地爾斎祭也、社者北面也。云々。とあり、同書に又曰ク天正年間小早川隆景、此国ヲ領セシ時、最此神ヲ崇敬シ、水田百丁ヲ寄附シ、又神仮面ヲ奉納有リ。廟社ノ上ニ高サ二十間許ノ岩有リテ、社ノ上ニ覆ヒ懸ル。此岩上ニ井有リト云フ。深秘ニシテ見ル事ヲ禁ス。と記している。



又、「筑前国続風土記」許斐山神社の行に、「田島の社に神事有時は、今も許斐の社人鐘崎の社人来て、神楽を勤む。両所共に古来宗像の社の神楽の役人也。」とある。この神面についておもしろい記事がある。「筑前国続風土記拾遺」王丸村の行に、許斐権現社、許斐山に在。熊野三所を祀る。相殿に宗像三神、織幡神をも祭る。云々、宗像家断絶の後は、神田もなく成りしかば、かかる神祭も行うことなく、小早川隆景神領を寄給ひしかども、いく程なく秀秋没収せられしかば、今は八月十四日に社家等打集ひて、神楽を奏する斗也。さばかり宗像五社の一ツなりし大社も、今は荒村田野の叢祠と均しく、拝殿も廃して、再営する人もなく、矮少なる神殿（九尺二間の社也）のみ残れり。昔は諸家の寄進状、其外神宝等もあまた有しが、度々の兵乱に、紛失して伝わらず。唯大宮司氏佐の奉納有し翁の仮面一、氏貞の寄附の仮面一、隆景卿の寄進の神楽面七箇、神鏡一面有。近代まで社家十二戸有しが、年を逐て絶、或近村に離散して、今祝戸八家の内、許斐に中津氏一戸あり。と記している。現在もこの神面は許斐神社の神宝として氏子の人々により大切に保管されている。

×　×

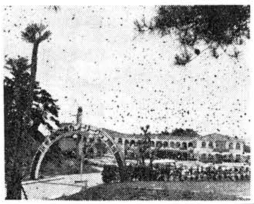
福岡国際カントリークラブ

鞍手・宗像の郡境に開場

去る八月廿九日初秋の風が爽やかに緑の丘陵を渡り、雲一ツ無き日本晴れの午前十時、松尚開発株式会社、福岡国際カントリークラブの竣工式が行われた。着工は昨四十三年二月十五日、この日は福岡県下でも近年に珍しい程の大雪の降った日で、祭場に当てられた鞍手、宗像の郡境をのぞむ丘陵は一面の銀世界、その様はあたかもスキー場の起工式と見紛うばかりであった。それから一年余、工事も順次進み同年八月一日に着工、鉄筋二階、建坪一四〇〇坪のスペイン風のモダンなクラブハウスと共に、建設費十八億円、総坪数五〇万坪、西日本で唯一の三六ホールズのコースが完成したのである。設計者は日本ゴルフ協会理事長浅見緑蔵、九州ゴルフ協会理事長島村祐正、施工者はコースの方が大平土木株式会社、ハウスの方が松尾建設株式会社。

このゴルフコースの特徴と云えば四ツの池をたくみに取入れた三六を誇る巨大なコースと云う事であろう。

竣工式場に当てられたコースは七又コース十番、式は祝詞奏上、そしてこの大ホールを祓い清める清祓の儀、玉串の奉奠と続いた後、松尚開発株式会社松園尚己社長によってコース入口の紅白のテープが切られた。同時に打上げられる数発の打ち上げ花火と風船、続いて亀井光福岡県知事によって始球式が行われ、美しいフォームに万来の拍手が湧いた。



写真は同クラブ正面口より望む景観

秋の大祭を前に

宝物館一部模様替え

宗像大社沖津宮出土の宝物（国宝）を中心とした当社宝物館は、放生会秋季大祭を前にして、九月末日模様替えがなされた。

これまで、東京、大阪、京都と展示を開催し、好評を博した。金指環、鏡、杏葉等の国宝指定類を網羅し、更に郡内から管理依頼された神宝、重要文化財をも同時に展示した。

依頼品の中には、赤間須賀神社神宝、則光作になる脇差一振。同じく赤間石丸神社神宝、国光作の短刀一振、更に当社大宮司拝領の大刀等と共に、河東稲元地区所有にかかる重文滑石製経筒一口をも展示した。

この経筒は仁平四年（一一五四）稲元村綾清宗が、現世安穏、後世菩提供養の為作らせたもので、明治の頃発見された。これまで京都博物館に保管されていたが、この度宗像神社宝物館に管理の移譲が行われたもの。今回の模様替えによって、未出展の沖ノ島出土品を始め、刀剣類、経筒等が加わって館内は賑やかになった。

宗像大社歌会

献詠百回を迎えて

宗像大社歌会の献詠は、この十月で百回を迎えました。

当歌会は昭和三十六年、当社境内に萬葉歌碑が建立された時を契機に、同人の間で献詠の機運が昂まり、同年五月に宗像大社献詠歌会として発足し、爾来九年間、毎月一回神前に献詠し、宗像誌に掲載してまいりました。

その間、毎月第三日曜日を定日として歌会が開かれ、流派に捉われず、自由に大胆に鑑賞、批評し合い、互に選び合い研鑽しつつひたすら神のみ心に通ずる真の表現が求められてまいりました。この長年の間には会員の変動も多々あり、運営等に関しては、昨年七月二十八日、名称が宗像大社歌会と改められ、会長に井原元彦氏（現福間町長）、副会長に立石ろせの氏が就任されるなど、漸増する会員を擁しうる大歌会への進展をみるに至りました。

これを機に会員相互の親睦をも計り、一層の邁進を致したく存じます。会員の皆様には誠心からなる献詠を戴き厚くお礼を申し上げるとともに、倍旧の御理解と御支援を御願いする次第であります。

〃農協池野支所に

農業倉庫増築起工〃

去る八月二十九日、玄海町農業協同組合（力丸義雄組合長）に於いては、池野支所に農業倉庫を増築する事になり、その起工式が当社司祭で斎行された。

この日は、玄海町高橋半三町長を始め議員、農協関係者等多数が参列された。

この倉庫は米を収納するためのもので、面積一七七平方米。四六〇〇俵の米を収納でき、満庫にすれば五六〇〇俵は大丈夫というもの。しかし、これで万全といわれる訳ではなく、焼石に水かもしれないとのこと。現在同町では二六〇〇〇俵の収穫取扱いがあり、その六五~七〇%の米しか収容できない状態に加えて、倉庫には二一三年前の古米がまだ出庫できずにいる。年々その数は増加し、その策もこうじられているわけだが、このままでは古米ばかりが次々積上がりかねないとのこと。

余剰米や米価問題等は、ここ数年来の深刻なる社会問題であるが、ここ玄海町にもそれらの波がおしよせている感深きものがある。

宗像伝説　其の九十五

大宮司の去就と宗像の忍び

永禄年間といえば室町時代から安土桃山時代に移り変る頃で全国で合戦が絶間なかった。

宗像大宮司に氏貞が就いた天文二十一年頃、山口の雄、大内義隆は家臣陶晴賢の為滅ぼされ、陶晴賢は毛利元就のために厳島で刺されたのである。

かくて元就は大内氏の領地を抑え、北九州に勢力を伸ばした。

一方、北九州に於ては少弐氏と並ぶ名門大友氏は豊前、筑前に進出し、はじめ大内氏、後には毛利氏と争うに至ったのである。

氏貞は始め大内氏に組し、弘治元年陶晴賢と毛利元就とが厳島に戦った時、氏貞は陶に味方した。大内義長が毛利に敗れた時、氏貞は大友義鎮と結び、元就派の秋月文種を討った。しかし、毛利元就の勢力が北九州に有利に展開しはじめた頃、毛利の幕下に入り、逆に大友義鎮に対抗した。将に昨日の友は今日の敵の諺の通りであった。

大内氏滅亡後大友氏に降った多賀美作守隆忠は弘治元年七月許斐城を攻略した。

時に大宮司氏貞は占部尚安等をして守らしめ、本木郷畝町河原で攻防をくり返しこれを破った。

このことは以前の伝説欄で述べた。大友義鎮は宗像と毛利の連絡を断つ為、毛利氏の拠点門司城を攻撃すると共に、宗像勢を攻略するために立花鑑載等一千五百騎を差し向けたのである。

許斐城を守備する占部尚安、尚持父子等四百騎では、衆寡敵しないことは明白であった。

ここに宗像一族は城を脱して大島に逃れたのである。

この戦国の時代、活躍した忍びの衆に長彦太郎というものがいた。彦太郎は忍びの頭領であった。諸国に輩下の者を派遣し、天下の動勢を詳に氏貞に報告した。氏貞がその去就を誤らなかったのは、かかる蔭の耳目があったからに他ならなかった。

弘治元年には上杉、武田が川中島で戦い、永禄三年には徳川が尾張桶狭間で今川義元を破る等諸国に戦乱が続き、忍びの衆の活躍はすばらしかった。

長彦太郎は江戸の笄町服部家のような存在であったと想像される。

占部尚安、尚持が許斐城を後にした時、氏貞もその居城でもある白山城を捨てて早急に軍兵を纏めて大島に渡ったのである。永禄三年三月二十七日、大島より大挙して許斐城の夜襲を決行できたのは、すぐれた情報組織があったからである。

かくして氏貞は遠賀荘、若宮荘西郷、野坂、赤間荘領家分須恵村、平等寺村、久原村、大穂村内殿郷の社領をことごとく手中に収めたのである。

長彦太郎の輩下は、上忍、下忍を含めて四十人を下らなかったというから、当時宗像一円の一武将にすぎない氏貞が、いかにこれらを重用し、機敏に事を処したかを窺うことができよう。

天文年間の知行帳に、東郷衆長彦太郎の知行として三町大、天正十三年、六町大とある。知行帳は天正年間のものがすべて多く記載されているので検討の余地があるとしても、天正十三年においても、依然としてその力を保持し、大宮司を援けていたことは、この知行帳によってもうかがえるのである。長彦太郎の出自については、英彦山修験の出とも、熊野那智の出とも伝えられるが定かでない。

（H）

宗像大社献詠
俳句作品集（八十二）

福岡　花田　主計
老いたれどいまになつかし放生会

東京　小浦登利子
いるか飛ぶ海の話や秋団扇

田熊　小野かをる
ふれ声の澄み金魚澄み子が走る

田熊　小野　淡坡
夜学終え皈る里川鴨のたつ

久留米　篠田太郎坊
農薬の煙り棚引く青田かな

門司　永島　哲夫
淡き灯の一窓ありてビルの秋

大井　木原ふさ子
ダンスの輪吾児と竝びて秋楽し

大井　吉田ますみ
住みわびて月見草咲く夕かな

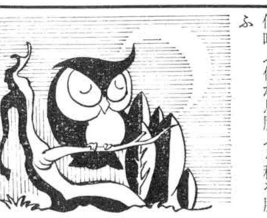
福岡　広田　美津
山笠の今昔語る博多弁

嘉穂　福永　アキ
おべん柿つぎ穂の初芽清やかに

京都　路　草
ひぐらしの声もうすれて浪白し

京都　葦浦　柴舟
あら楽やわれこほろぎの庭に聞く

佐賀　耕　喜
何喰ふ僧か馬肥ふる秋を肥ふ



出光佐三一問一答シリーズ ㊴

働く人の資本主義

2　働く人とは誰をさすのか

質問　たしかに今日の常識からみれば資本主義といえば資本家とか、資本中心の経済社会を連想させ、「働く人」という言葉からは資本家や経営者と対立する労働者というイメージをえがきがちです。この二つの異質的と思われるものを結合させることは、一見奇異な感じをうける。そこで、言葉の意味からはっきりさせていきたいと思います。

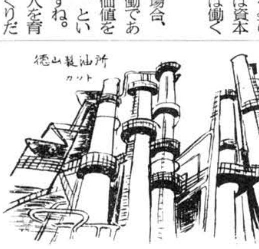
まず「働く人」というとき、出光さんはどういう範囲の人を、あるいはどういう種類の人を考えておられるのですか。

出光　私はこの世の中に働かない人はないと思う。そういう意味で全部働く人だと思っています。ただ、それではばくぜんとして問題のポイントがわからなくなるので、とりあえず「働く人」とは、株式組織の企業で働いている人を考えてもらえばいいと思いますね。そして金の力で高配当を受け取っておる人以外の人はみな働く人です。経営している人も筋肉労働している人も、頭を使う人も、みな、働く人と思うんです。筋肉労働だけが働くことであるなど、そんな単純なことは考えませんよ。経営者と従業員とを分けているということが、私にはふしぎなんです。私の会社ではもう、若い人が「私は経営者ですよ」ということを言うんです。入社して二年もすると、そういうことを言うようになる。その実は筋肉労働をやっていながら「私は経営者ですよ」と言いうることは、労働者とか経営者などの区別を超越しているということですね。

要するに、働いている人を金の力によって搾取している人は資本家であって、それ以外の人は働く人ということです。

質問　働く人といった場合、精神労働であろうと頭脳労働であろうと、なんらかの社会的価値をつくりだす人であればよい、というふうに考えられるわけですね。そういう意味では、教師も人を育てることにおいて価値をつくりだす人だから、働く人にはいりますね。

出光　いやそうなるとね、労働者とはなんぞやということになって、学問的に微に入り細にわたって結局わからなくなる。ここで肝心なことは、働く人の結果を働かない人が持っていってはいけないということなんです。働く人が搾取されるから、そこに対立がおこる、だから搾取してはいけないということを言いたいために、働く人という言葉を使ったとも言いうるんです。そしてここでは事業経営に限定して論じているから、事業のうえで働く人がどういうものかということで論じてもらいたいと思います。そういう意味でみるとき、経営者も働く人だと私は思うんです。



質問　出光の例でいえば、上は店主から下は最先端のガソリンスタンドで働いている人まで、全部が働く人ということですね。

出光　それと同時に、最先端の油さしをやっている人も経営者であるということなんです。経営者であり働く人であるということだから、そこに対立ということがありえないわけです。

3　働く人の福祉を尊重する資本主義

質問　出光さんは日頃、働く人を金の力によって搾取する人が資本家だと言われ、同時に昔のような大資本家は日本にはいなくなったと言われておるようですね。しかもなお、搾取絶滅のために「働く人の資本主義」を提唱されている。出光さんが考えておられる資本家の具体像とはいかなるものですか。

出光　実際に即して言えば、資本家というものは株主として総会に出て、経営のあり方や配当額の決定などに発言権をもっているもの、ということになるんじゃないですか。それが世界共通の資本家の姿だと思うんですが、そういう意味の資本家はもう日本にはいない。

戦後、税法が変わって、累進課税によって所得の差は非常にせばめられ、さらに相続税なんかでどんどん取られるから、二代か三代になればほとんどの金持はつぶれてしまうのが実状ではないですか。やみ屋みたいなものが出てくるかもしれんが、それは例外として、今後は金持はますますなくなっていく。

そして富の分配が大衆的になってきたから、労働組合員の奥さんあたりが株を買って、いわゆる大衆株主になっている。そういう小さい株主が総会に出て経営を左右することは、理論としては成り立つかもしれんが、実際は行われないですよ。だから、日本には資本主義の悪いところはなくなってきている。もちろん例外はありましょうが、一般的にみてそういうことが言えると思うんです。

そこで問題は、こういう大衆株主をどのように保護するかです。こういう人たちは経営についてはなにも知らないから、直接、会社の株を買わせるとだまされる場合がおこりますよ。証券会社が責任をもって株式を売買するような仕組みになっておればよいが、なかには、自分の金もうけばかり考えて、大衆株主には大きな損をさせることがあるというのが実状じゃないですか。

日頃、私が言っているのは、銀行が大衆の大事な金をあずかって、責任をもって大衆にかわって投資をする。貸し付けじゃなく投資をするようにせよということなんです。そして大衆には確実に金利を払う。これがほんとうの形だと思いますね。

質問　そうすると昔のような大資本家はなくなり、そして今日の大衆株主も資本家としての機能を発揮しないとすれば、出光さんはどういう意味で搾取はいけないということを強調されるのですか。搾取している資本家が現実にいないとすれば、誰を指して搾取するな、ということを言われるわけですか。

出光　昔のような搾取する資本家がなくなってきたということは、非常に結構なことと思いますね。ところが、それでは産業界に搾取はなくなっているかというと、いぜんとしてある、それは株の高配当です。資本家はなくなって経営者になったけれども、その経営者が、できるだけ高配当するのが経営者の責任であり、また、自分の有能さを証明するもののように考えておる傾向がありはしませんか。一方、大衆株主も株の高配当を期待したり、株の売買によって金もうけを考えている。私はここに資本主義の実体は変わったのに、それに気づかずに昔の資本主義経営の悪夢を追いつづけておりはしないかと思うんです。夜が明けて出てきた幽霊のようなものですね。

それじゃどういう考え方をすればいいかというと、私は「金の力には限度がある」「金の力に限度あらしめよ」と言いたいんです。なにか金の力が無限の力を発揮するように錯覚しているところに大きな誤りがあるように思いますね。もっとも、資本主義の時代ですから、金の力を無視することはできません。また、人間というものは働いて得たものを全部使わずに、子供のためとか、友人、社会のために尽くす目的で貯蓄しますね。そういうことをやる人がほんとうの人間の尊厳をもった人だと思うんですが、そういう貯蓄の金に対して、それ相当の金利は認めるべきです。

（つづく）

×　　×　　×　　×

経営とは何か
PFドラッカー

知識労働者に対する倫理的責任

しかも過去一〇年間の日本の実績は、日本の産業が世界のどの土地においても、十分にその国の産業と競争し得るということが立証されている。

ところがこの経済上の実行というものの行き方は、どの国家経済、どの国家経済内の個々の産業、また産業内の個々の企業にしても、あくまでも広い国際市場における競争力を十分に持つ、すなわち相当にコストが低いということが要求されている。そこに第一の大きな要求、第一の大きな負担がある。

すなわち十分に競争し得るだけの低コストでものを生産し、これを世界市場で他の産業国家と競争しながら成功をおさめていかなければならない。これは他の要求、すなわち十分な利潤を上げて将来の発展に備える資本を造成しなければならないということと相反する関係にあることになる。

そういった大きな負担を負うことがビジネス・マネージャーのまず第一の責任である。どんな倫理体系でも、たとえば靴をつくっている職人の非常に重大な責任は、靴をつくることにあるということを教えているのである。

ところがこのビジネス・マネージャーについて、特に異なった点をあえて考えてみれば、ビジネス・マネージャーはまず完全な経済的実行力というものを発揮した上でないと、他の彼の倫理上の責任を果たすことができないという点にある。そこでビジネスマンの倫理的機会の第二の点というのは、社会的な面を指しているのである。

近代的な企業というものはどの産業国家においても、特に知識、経験、技術を備えた人たちの最大の雇用者である。こういった事態が発生したということはごく最近の事柄である。

アメリカの数学の学会は、明治二〇年に設立された。その設立当初ではこの学会の会員のうち僅か一人が企業で働いていた。それからのち二五年を経過して、明治の終わりから第一次世界大戦の起こる直前では、アメリカの数学会の会員で産業界で働いているものはわずかに一二名しかふえていない

したがって学会設立当初から考えると二五年の間に一二倍である。さらに次の二五年、すなわち第二次世界大戦直前の設立後五年目には、また一二倍にふえて、産業界に雇われている数学者の数が約一五〇名にふえている。

ところがさらに、二五年たった一九六三年になると実に一八〇〇人の本職の数学者が産業界に雇われている。これまた二五年間で一二倍にふえている。この二五年ごとに一二倍という率で今後も数学者が必要になってくるとすればこれから一〇年の間にアメリカでは数学者が不足するということがいえる。　同じように経理の専門家、あるいは心理学者、市場調査専門家など高度の教育を受けている特殊技能を備えた人たちの産業界における雇用というものは、この数学者の場合と同様、急速にふえている。したがって現在ではおびただしい数が産業界に雇用されているということがいえる。

こういった教育を受けて技能を備えた人が、どの国家経済においても真の資本になるということがいえる。これは単に非常に重要な人々だから資本であるといっているのみならず、これらの人たちを訓練し、教育し、育てあげるということは多くの投資がなされているわけで、実際の生産的な資源に対する投資の額からすれば、これらの人たちに投入されている金額が、国家社会の中でも一番大きな額があてられていると考えてもよい。

――宗像藪庵先生百話――

南方　華やかなりし頃

宗像太郎坊

開き始めると完全に開き終るまで一カ月もかかる。花の高さは二米におよび、白人より高い。一カ月もかかって開いた花は数日にしてしぼんで腐ってしまう。花と葉が一緒にある事はなく、今年、花が開くと来年は同じ株から葉のみが出ている。一八七八年の夏、イタリの植物学者ベッカリ氏がスマトラ西部で初めて発見した。球根には多量の蓚酸石灰の結晶があり、食用に供することは出来ないといわれていたが、茨城大学教授の佐藤正巳氏がコンニャクの製造に成功し、本人が試食したが異常を認めなかった。

ラフレシア

ラフレシア **Rafflesiaceae** は世界最大の幅を持った花で、スマトラ中部の山中と南米とのみに見られる花である。数年間に一回花をつけるが、花の直径が五尺におよぶ。発見者のスマトラの州長官ラフルスの名をとって、ラフレシアと名付けた。ラフルスはご存知のようにシンガポールを、ジョホールの王様より、安い金で買いとり、初代シンガポール総督となったファイトのある人であるが、日本軍がシンガポールを陥落させたとき、辻の書に、ラフレス像が色あせて見えたと書いているが、今日では色艶まして見える。そして辻政信の姿は杳としてわからない。おそらくは、一土民兵と思われ、射殺されているのであろう。

熱帯潰瘍

苦力病又は安南病ともいわれているが、苦力でなくても出来るし、安南人に限らずひろく南洋一帯に見られる潰瘍である。下肢、殊に下腿と足関節後部に多い。外傷に引続いてそこよりだんだん円形の潰瘍が出来て拡大してゆく。周囲が不良肉芽により盛り上って見える。病原菌は **SPirochaet aschaudinni** および紡錘状杆菌、その他雑菌の混合感染である。潰瘍面よりは悪臭を放ちこの世の匂いとは思われない。労務者が昼寝している時に見ると、潰瘍周辺の不良肉芽組織に蝿が肩押し合って列び、中の膿を舐めている。ちょうど支那料理の食卓を囲んで、みんなが喰ってるように見える。労務者達はそこでうまいことを考え出した。われわれも諭えられるところがある。薬のない戦地では成程なあ、教養のない彼等でも経験と思いつきは大した物だと思った。まずお粥を作って、これに腐らないようにまた、殺菌のために塩を混ぜる。粥食塩泥膏を作って潰瘍面に乗せ、これに薬草という草の葉を掌で揉んで柔らかくし、火にあぶって殺菌して潰瘍面をこれで覆う。うまくくっついて蝿はたかれないし、中の粥は落ちない。そして粥は日に二回とりかえる。

病原菌がスピロヘータであるので、サルバルサン注を行なうが、局所の膿汁からはなかなかスピロヘータは発見されない。深部にすんでいる。水と親和性があるらしく、水で潰瘍面を洗うと、あとが悪化する。

局所療法には沃度フォルムが特効的で、これは実によく効く。潰瘍の周辺にこの粉末を振りかける。中の方は必要がない。そしてガーゼのほうに亜鉛華軟膏かチンク油を塗って、上からぺったりと被せる。するとうまく乾燥して、良性の肉芽が上ってくる。

わたしはかって統計をとったことがあるが、下腿の下三分の一の部分と、足関節に多い。足関節後部に出来た潰瘍はアキレス腱を伝ってどんどん上昇して行き、なかなか根治できない。

『笑えぬお盆の笑話』

福岡　高橋　昇

◎お盆十三日の昼下り。薄ぼんやりした十五、六才位いの男がやって来て「わしの行く家は何処じゃろうかあ」と尋ねる。「あんたの行く家、何と云う名前な」「それ知らんとですたい」「こりゃあきれたね。名前知らんで尋ねたってわしが知るものか、この人阿呆かいな、一体何処から来なったとな、お内は何と云うのかい」「それ知らんもん、昨夜あの山の向うの知らぬ家に泊めて貰って今朝出る時家の伯父さんがおまえ峠越して行くならこれば届けて置いて呉れ、おれは明日行くからと云うてね」と言いなるけん、はいと云って持って来たばってん届ける家の名忘れてしまって困っとるたい。伯母さん知っとらんかい」「こりゃ又どうじゃろうかい。来た家も届ける家も知らんとは、阿呆の頂上だ。見れば新仏の供物らしいが新仏言うても今年しゃ此村でも三十七軒もあるし村も広い事じゃ、一軒一軒尋ねて見なさい」馬鹿々々しい。来た家も行く家も知らんなんて、わしはお盆掃除で忙しいんじゃ。

来た家も行く先も知らぬとあっては誰でも笑う外無い阿呆な話で全く話にならぬ話だが、此処で一寸笑うのをやめて考えてみたい。

そもそも人生は産曰から死四に至る六、七十年、長くても百年の旅路と言っても差支えあるまいが、其生まれ来るや何処から何の目的で来るや、一生確たる自信自覚も無くて死んで行く迄、只営々と其円辺の事に追われて死んでどうなるか？行く先は何処か？「知ってる人は手を揚げて見よ」幾億幾万人中果して何人あるぞ、これを知るをこそ真の智恵悟道ではあるまいか？それを知らずに今日々々の事だけを知って得るとして天性の愚人を阿呆々々と笑う其人こそ大所高所から見れば知って笑われる痴人ではないか深く反省し修業すべきだ。

来し方も行衛も知らず人の世を
八十二年只に歩める

これが明治二十一年十一月三日大日本帝国九州筑前国宗像郡池野村田野高向の高橋家に産まれ来て近く彼の世に行く私の自省の一首だ。

（原文のまま）